

令和元年6月11日現在

機関番号：72622

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03174

研究課題名（和文）渭河流域における秦文化成立の考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological research about the development of Qin Culture at Weihe River basin in China

研究代表者

飯島 武次 (Iijima, Taketsugu)

公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員

研究者番号：90106641

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：中国陝西省および甘肅省東部の渭河流域に分布する早期・前期秦文化から春秋戦国時代秦文化の遺跡・遺物の考古学的調査を行った。3年間にわたり、北京大学考古文博学院と学術交流を行い、陝西省内の秦建国期・春秋時代の秦人および周人の遺跡発掘に参加した。中国宝鶏市鳳翔県の秦都雍城遺跡の発掘調査に加わり、秦建国期の秦人の遺跡を求めて踏査も行った。その結果、先学の諸説ある中で、甘肅省礼県で発見された秦建国時代の大堡子山M3号墓の墓主は秦襄公、M2号墓の墓主は襄公の配偶者である可能性が高いとの結論を導き出した。また秦櫟陽城・咸陽城の前に造営された春秋戦国時代雍城の造営工程を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

3年間にわたり、陝西省内の西周時代後期を含む秦建国期および春秋時代の秦人関係の遺跡発掘に参加し、また、陝西省・甘肅省東部の渭河流域に分布する春秋戦国時代の秦文化遺跡の踏査を行ってきた。その結果、日本では殆ど研究の行われていなかった建国期の秦の葬制と都城造成の発展変化の様相を捉えることが出来た。この地域における日本人による発掘参加を含む研究は初めてであった。秦文化は漢唐文化の源で、我が律令体制下の文化は秦漢文化から学んだ物が多く、秦文化の成立を考古学的に遺跡・遺物の上から研究することは、我が国文化に大きな影響をもたらした漢唐文化の淵源を研究することを意味し、大いに意義があった。

研究成果の概要（英文）： We performed the archaeological investigation of remains in the first half year Qin Culture and the Springs and Autumns period Qin Culture to be distributed at Weihe River basin, Shaanxi and eastern Gansu in China. For three years, we have exchanged School of Archaeology and Museology Peking University. We participated in the remains excavation of the Qin Culture of the Springs and Autumns period. And we performed the archaeological general survey at Weihe River basin in Shaanxi. As a result, the master of grave of the Dabaozishan No.3 tomb at the Early Springs and Autumns period discovered in Lixian county, Gansu arrived at a conclusion Qin Xianggong. The master of grave of the Dabaozishan No.2 tomb was likely to be Wife of Qin Xianggong. In addition, We were able to clarify a building plan of the Qin Yongcheng castle which was built long before Qin Capital Xianyang castle.

研究分野：東洋考古学

キーワード：秦文化 寺窪文化 秦人 西戎 毛家坪 大堡子山 雍城 秦王陵

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 秦の起源に関しては、その起源を西方に求める説や東方に求める説、或いは周以外の異民族に求める説も存在したが、飯島は秦の起源を考えるに当たって、西周の文化と秦の文化を切り離して考えることは出来ないと考えていた。また、漢・唐文化を通じて日本文化が大きな影響を受けた中華文明の源は秦の文化にあり、その意味に於いて秦文化研究が必要となってくるとも考えていた。日本における過去の考古学的な秦文化研究は遺物と考古報告書による物であった。飯島が過去に発表した「秦葵紋瓦當考」・「東周時代秦の副葬陶器」、岡本秀典氏が1985年に著した「秦文化の編年」などがそれにあたる。過去に日本人によるフィールドでの秦文化遺跡調査は行われてこなかった。

(2) 秦の建国期の様子は、考古学的に殆ど不明であった。東周時代の秦の領域はおおむね西周王朝の領域に重なり、その実態から西周文化遺跡に西周時代秦人の痕跡があるのではないかと考えられたが、秦が雍城に遷都するまでの秦の都城に関しては、考古学的には不明の事が多かった。秦の王陵に関しても雍城南郊の秦陵園の出現以前の姿は十分には解明されていなかった。咸陽に秦都が置かれた時代の王陵に関しても陵園の配置や、墳丘の出現時期に関して研究すべき事柄が多かった。

引用文献

飯島武次、秦葵紋瓦當考、東京大学文学部考古学研究室研究紀要、第2号 東京大学文学部、1983、77-100。 飯島武次、東周時代秦の副葬陶器、中国周文化考古学研究、1998、312-330。

岡本秀典、秦文化の編年、古史春秋、第2号、1985年、53-74。

2. 研究の目的

(1) 中国甘肅省東部から陝西省の渭河兩岸に分布する西周時代末から早期秦文化の遺跡・遺物、および春秋戦国時代秦国の遺跡・遺物の考古学的調査と研究を行い、始皇帝による統一秦帝国成立までの秦文化を考古学的に明らかにすることを研究目的とした。

(2) その研究目的遂行のために、中国側の渭河流域西周遺跡・秦遺跡の発掘に参加し、あわせて秦の起源を求めての考古学的踏査と遺物調査を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 『史記』を初めとした古典文献、金文、簡牘等に見える秦関係史料に関して、考古学の立場から整理と再確認を行った。

(2) 中国側が行う渭河流域秦遺跡および西周末時代後期遺跡の発掘に参加し、秦の起源を遺跡と出土遺物の上から探求した。つまり陝西省岐山県鳳雛南(賀家村北)遺跡、陝西省扶風県召陳北遺跡、陝西省鳳翔県雍城遺跡の発掘に参加した。

(3) 陝西省・甘肅省の渭河流域で西周時代遺跡および東周時代秦文化遺跡の踏査を行い、当該地で出土した土器・瓦・埴・青銅器などのスケッチ・写真撮影をおこない、秦資料の収集を行った。東周時代秦文化に関わる土器・瓦當・青銅器の写真による資料カードを作成した。

(4) 古典に示された秦の歴史・故事と考古学的な遺跡の関係を探求し、その研究の中で幾つか

の秦陵の墓主名を推定した。

4. 研究成果

(1) 『史記』秦本紀には、

周宣王乃ち莊公の昆弟五人を召し、兵七千人を與へ、西戎を伐たしむ。之を破る。是に於て復た秦仲の後及び其先大駱の地犬丘を予へ、之を并有せしめ、西垂の大夫と為す。……西戎、犬戎、申侯と與に周を伐ち、幽王を驪山の下に殺す。而して秦の襄公、兵を將いて周を救ひ、戦い甚つとめて功有り。周、犬戎の難を避けて、東のかた雒邑に徙る。襄公、兵を以て周の平王を送る。平王、襄公を封じて諸侯と為し、之に岐より以西の地を賜ひ、曰く、戎無道にして我岐豐の地を侵し奪へり、秦能く戎を攻めて逐へり、即ち其地をたもてと。與に誓ひて之を封爵す、襄公是において始めて国す。

と書かれている。西垂の地に位置する大堡子山遺跡群（踏査）は、甘肅省礼県永興郷と永坪郷の境界、西漢水北岸に位置している。ここで南北に配列された2基の中字型墓が盗掘され、その後調査された。南側のM2号墓は、全長88m、北側のM3号墓は全長115mであった。この2基の大墓の被葬者に関しては、諸説有るが大堡子山大型墓から出土した青銅鼎・簋に「秦公」の銘があり、史書の記載、墓の考古学的年代、地理的位置から、さらに実質的に秦公を名乗るのは第1代襄公からである事から、M3号墓の墓主は襄公、M2号墓の墓主は襄公の配偶者である可能性を推定した。

(2) 陝西省鳳翔県の秦都雍城遺跡は、雍水の北岸に位置し、雍城南郊に環濠（兆溝）に囲まれた10個所以上の秦公陵园が存在し、中国側の付近のボーリング調査で49基の大墓が検出されている。秦公1号墓（踏査）は、中字型墓、東向きで、墓室長さ59.4m、幅38.45m、深さ24m、墓道を含む全長は300mで、墓の上からは、柱穴や排水管・瓦の発見が在り、寢殿が造営されていたと考えられている。出土した石磬の銘文に秦第13代景公の祖父桓公、父共公の名があり、従って被葬者は春秋時代後期の秦第13代景公の可能性があるとされている。この秦公1号墓を景公墓とする説を踏まえて、『水経注』渭水注の記述から14号秦公陵园のM45号墓の被葬者を考えた。『水経注』渭水注に、

雍水……南流して胡城の東を逕る、俗名なり、蓋し秦惠公の故居なり、所謂祈年宮なり、孝公又橐泉宮と謂う。按ずるに、地理志に曰く、雍に在り、崔駟曰く、穆公冢は橐泉宮祈年觀の下に在り、皇覽亦言う、是なり。……余謂く、崔駟および皇覽、繆志なり、惠公孝公いずれも是れ穆公の後なり、繼世の君なり。子孫由なくして祖宗の墳陵に宮を建てる由無し、以て是を推すると、二證の非實を知るなり。

とあるが、秦公1号墓の墓上での柱穴や排水管・瓦類の発見例、雍城での橐泉宮瓦當や祈年宮瓦當発見を知ると、崔駟や皇覽が正しく、この北魏時代の酈道元の『水経注』の記載に誤った認識があると考えられる。14号秦公陵园では「橐泉宮當」瓦當が採集され、M45号墓上に橐泉宮が建っていた可能性があり、M45号墓は秦第9代穆公の墓である可能性があると推定した。

(3) 『史記』秦始皇本紀に、

惠文王國を享くること二十七年、公陵に葬る。「正義、括地志に云う、秦惠文王陵は雍州咸陽縣西北一十四里に在り」。悼武王を生む。悼武王國を享くること四年、永陵に葬る。「正義、括地志云う、秦悼武王陵雍州咸陽縣西北十里に在り、俗に周武王陵と名づく、非なり」。とあるが、陝西省咸陽市渭城区周陵鎮に清畢沅の周文王陵碑と武王陵碑を有する2基の方形墳丘墓の周陵（踏査）が存在する。中国側のボーリング調査の結果、周陵の地下には南北に並ぶ

亜字型墓とそれを取り巻く墓域を形成する環壕の存在が明らかになっている。この墓は、秦第27代武王の永陵である可能性があるとされる。なお、永陵の東南約3.8kmにある延陵(漢成帝陵)の西辺にある2基の墳丘と南北の亜字型墓は秦第26代恵文王の公陵との推定がある。雍城南西の秦公陵园の秦墓には墳丘は存在しない。しかし、永陵・公陵においては亜字型墓の墓室と墳丘が相似的に重なり、現存する墳丘を戦国時代の遺構と考えざるをえない。今回の周文王陵と武王陵の踏査と、『史記』始皇帝本紀、正義の記載、さらに中国側ボーリング調査の結果から、周文王陵を秦悼武王墓、周武王陵を悼武王妃墓と考えた。現状では、恵文王の公陵と悼武王の永陵が秦陵の最も古い墳丘墓となるとの考えを持った。なお湖北省孝感市雲夢県睡虎地の秦時代のM11号墓出土の竹簡、『雲夢睡虎地秦墓』1981 竹簡No.560には、

何を甸人と謂うか、甸人とは孝公獻公の冢を守る者也。

とあり、焦南峰氏は「冢」を墳丘のある墓である可能性があると述べる。冢が墳丘墓ならば、獻公の没年は前362年で、前4世紀前半には墳丘墓が出現していたことになる。

(4) 秦は、徳公の元(前677)年に初めて雍城の大鄭宮に居住し、その後、雍城は秦獻公二(前383)年に西安市臨潼区県武家屯付近の櫟陽城に遷都するまで、秦の都であったとする説が一般的である。陝西省鳳翔県付近は、従来からも秦雍城の地と考えられてきたが、1962年に鳳翔県南故城村の東側で、「年宮」「棧」字のある漢代の文字円瓦當が発見されるに及んで、それらの文字が、秦都雍城に存在した蕪年宮の「年宮」や棧楊宮の「棧」を示す物と解釈され、鳳翔県城南一帯の豆付村付近を雍城の地に比定することが可能になった。

秦都雍城に関しては、発掘参加と地面調査を行った。秦都雍城の遺跡は雍水河の北岸、紙坊河の西岸に位置し、その全体的な平面形は、一辺約三千数百mの不規則な方形と推定され、初期の造営は雍水河と紙坊河の合流点附近の水濠の造営から開始されたと言われている。一般調査の結果、残存する西城壁の長さ3200m・幅4.3~15m・高さ1.65~2.05m、残存する南城壁の長さ3300m・城壁幅4~4.75m・高さ2~7.35mを確認した。東城壁は東風水庫の北側に残存するのみであるが、幅7.5~8.25m、残高3.75mほどが残っている。北城壁は鳳翔県の市街地下に埋設されているが、全長450mほどと推定できた。

鳳翔県南の馬家荘は、秦雍城遺跡の中央部に位置する小村であるが、ここで過去に1号建築址群が発見されている。1号建築址群は東西160m、南北90mの面積を占めていた。1号建築址群は、大門・中庭・朝寝(祖廟)・東西廂(昭廟・穆廟)・亭台とそれらを取り囲む壁などから成っていた。1号建築址の築造年代は、出土した丸瓦・磨消縄紋半瓦當の年代から、私見では前7世紀後半から前6世紀と推定される。1号建築址の南東約400mで朝寝建築が発見されているが、2018年度は1号建築址と朝寝建築の中間地点に位置する建築址の発掘に加わった。西周時代末に繋がる磨消縄紋半瓦當や槽形板瓦の出土があった。

(5) 東周時代の秦関係遺物研究としては、過去に実足図と写真を中心に行った副葬土器と瓦當研究に関して、それらと実物遺物との照合に努めた。宝鶏青銅器博物館収蔵の秦墓出土土器の観察から、前8世紀から前7世紀前葉の秦平陽時代の副葬土器として宝鶏市福臨堡遺跡出土の壺などの土器を改めて、その時期の遺物と認識した。同じく前7世紀前葉を中心とした時代の副葬土器として咸陽博物館蔵の宝鶏市楊家溝の西高泉村遺跡M3号墓出土の簋・甗などの土器を確認した。前6世紀の副葬土器として秦公1号墓陳列館蔵の秦公1号墓出土の豆・罐・盆・鬲・甗などの土器を確認した。前5世紀の副葬土器として秦公1号墓陳列館蔵の秦公1号墓陵园北側出土の壺・罐・簋などの土器を考えた。以上副葬土器に関しては春秋時代の遺物を中

心に研究を進めた。戦国時代の土器として甘肅省の礼県博物館に収蔵されていた西戎の遺跡とされる甘肅省張家川馬家塬遺跡（踏査）出土の広口壺・盆・耳皿・陶倉・鬲などの土器資料を観察したが、それらの遺物が戦国時代に属するとする以上の判断は出来なかった。雍城遺跡の発掘では、瓦當を含む多くの瓦が出土した。雍城出土の磨消縄紋半瓦當は基本的に春秋時代遺物であるが、周原召陳遺跡出土の西周時代の鱗状重圈紋半瓦當の伝統を受け継いでおり、前 8 世紀まで遡る可能性がある。また岐山県鳳雛南（賀家村北）遺跡出土の槽形板瓦は、雍城出土の槽形板瓦に繋がると考えられる。秦における瓦の使用が、六国に先んじている可能性が極めて高い。雍城出土の戦国時代の瓦には、犬・鹿・馬・鳥・蛙などの鳥獸紋円瓦當が著しく多いが、特に犬・鹿・鳥が好んで用いられている。戦国時代後期には葵紋瓦當が出現する。六国とは異なる秦における先進的な瓦使用の歴史を考古学的に確認することが出来た。

引用文献

焦南峰、咸陽熾家溝陵園における考古学的発見と探索、中華文明の考古学、2014、230-240。

中国科学院考古研究所宝鷄発掘隊、陝西宝鷄福臨堡東周墓葬発掘記、考古 1963 年第 10 期、1963、536-543。

宝鷄市博物館・宝鷄県図書館、宝鷄県西高泉村春秋秦墓発掘記、文物 1980 年第 9 期、1980、1-9。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

飯島武次、西周陶器の分期研究・・・豊鎬地区的陶器、豊鎬考古八十年・資料編、中国社会科学院考古研究所・陝西省考古研究院・西安市周秦都城遺址保護管理中心、2018、621-640

飯島武次、春秋戦国時代秦王陵の被葬者と変遷、駒沢史学、査読有、第 91 号、2018、181-196

角道亮介、周原遺跡における西周都城の都市構造、中国考古学、査読有、第 18 号、2018、9-30

大日方一郎、西周時代倣銅器に関する初歩的検討、中国考古学、査読有、第 18 号、2018、73-89

角道亮介、考古資料から見た龍の起源、中国古籍文化研究、上巻、2018、447-460

〔学会発表〕(計 7 件)

飯島武次、関于大堡子山秦公 3 号墓和 2 号墓的墓主、第二届中国考古学大会、2018、中国成都市金牛賓館

飯島武次、春秋戦国時代秦王陵と始皇陵の出現、駒澤大學史学会 2018 年度大会、2018、駒澤大學

飯島武次、東周時代秦国大型墓の葬制および被葬者名、一般社団法人日本考古学協会第 84 回総会、2018、明治大学駿河台キャンパス

角道亮介 (Kakudo Ryosuke), "Changing Eastern Boundaries of the Western Zhou State: Insights Provided by Inscribed Bronze Sources", The 8th Worldwide Conference of the Society of East Asian Archaeology, 2018, Nanjing University

飯島武次、渭河流域における秦文化成立の考古学的研究、日本中国考古学会関東部会、第 188 回、2017、駒澤大學

大日方一郎 朝倉一貴、秦直道路線の最小コスト分析からみた一考察、日本中国考古学会 2017 年度大会、2017、東京大学本郷キャンパス

大日方一郎、陝西鳳翔県雍城遺跡発掘参加報告、日本中国考古学会関東部会、第 175

回、2016、駒澤大学

〔その他〕

ホームページ等

飯島武次、東周時代秦国大型墓の葬制および被葬者名、一般社団法人日本考古学協会第84回総会研究発表要旨、2018、一般社団法人日本考古学協会、80-81

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：角道 亮介

ローマ字氏名：KAKUDO,ryosuke

所属研究機関名：駒澤大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 00735227

(2)研究協力者

研究協力者氏名：大日 方一郎

ローマ字氏名：OBINATA,ichiro

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。